

「生きる」とはいかなることか。

いつの時代も、人は、自分自身に、そして、社会に向けて、この問いを投げかけてきました。今日もまた例外ではなく、不況の中で、不安定な国際情勢の中で、私たちは「生きる」ということについて考えています。「昭和」という時代、人びとは、戦争中には生と死についての問いを鋭く突き付けられ、敗戦後には価値観の大きな転換、さらには高度経済成長をも経験しました。本シンポジウムでは、このような激動の時代ともいえる「昭和」について、歴史・文学・芸術・教育・産業の観点から再検討してみたいと思います。「生きる」ということは、すべての人にとっての問題です。世代を超えて考えることが大切でしょう。本シンポジウムには、静岡文化芸術大学の教員のみならず、学生たちも登壇いたします。会場にお越しの皆様におかれましては、「昭和」という時代がいかなる時代であったのかを改めて振り返り、人が「生きる」ということはいかなることなのかを考える機会にさせていただきましょう幸いです。

産業

教育

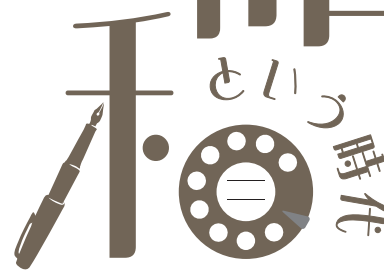
芸術

文学

歴史

昭和

シンポジウム



PROGRAM

13:00 開会の辞

第1部 戦争と昭和

[講演]

13:10 ~ 13:50 学鷲の戦後小説

—若き『近代文学』派・原通久の文学とその背景—

宮崎千穂 (国際文化学科准教授)

13:50 ~ 14:30 いかに「神」に問いかけるか

—戦後日本演劇に描かれた天皇への問いかけ—

稲山 玲 (芸術文化学科准教授)

[学生発表]

14:40 ~ 15:00 一人の海軍整備兵の戦争 —大村金次の手紙から—

田平寛太 (国際文化学科2年)

15:00 ~ 15:20 第二次世界大戦をめぐる日・フィリピン

歴史教育の比較 —戦争の記憶と歴史認識に着目して—

尾杉はな (国際文化学科2年)

第2部 昭和の産業と文化

[講演]

15:30 ~ 16:10 捕ることと撮ること

—戦後捕鯨 (船団) の象徴性をめぐって—

加藤裕治 (文化政策学科教授)

[学生発表]

16:10 ~ 16:30 貨物列車が支えた風景

—昭和という時代の物流とくらしの変容—

馬淵 斎 (国際文化学科2年)

16:30 ~ 16:50 静岡における茶教育の歴史と今後の展望

中村優奈 (国際文化学科2年)

16:50 閉会の辞

2026年11月14日(土) 13:00-17:00 (開場・受付開始12:30)

静岡文化芸術大学 南278大講義室

JR浜松駅より徒歩15分／遠州鉄道「遠州病院駅」より徒歩8分

遠鉄バス浜松駅北口バスターミナル10番のりば バス停「文化芸術大学」下車

※本学には駐車場がありませんので、公共の交通機関をご利用ください。



◀ お申し込みはこちらから / 定員180名 (先着順)

入場無料

※録画・録音・写真撮影は禁止とさせていただきます。



お問い合わせ先

静岡文化芸術大学 研究・連携推進室 [受付時間] 8:30 ~ 17:00 (土・日・祝を除く) [TEL] 053-457-6105 [FAX] 053-457-6123 [E-mail] chiiki@suac.ac.jp